

五十字劇評 NO.73

言わせて! 今日の芝居

Nana Produce 其の女

810月例会 Nana Produce『其の女』(2025.10.1-2)

【20代】
▼「その頬、熱線に焼かれ」の弘子とは別人のようで戸惑いました。ケロイド治療で心境の変化はあれど、今までの苦労や悲しみの弘子の想いや経験といった弘子の根幹が抜けた、不自然な明るさしか伝わって来ませんでした。いくら親しい人に見せる姿であっても、歳を重ねても、人間はそう簡単には変わらないのでは。魅せる側面を間違えている気がしてなりません。演出・制作側の意向なのでしょうか…。台本を文字で読んだ時のほうが面白かったと感じてしましました。弘子の心情、時代背景、セリフはないけれどそこに居る相手の会話が見え、一緒に人生を辿りました。弘子の心情、時代背景、セリフはないけれどそこに居る相手の会話が見え、一緒に人生を辿りました。(女性)

【50代】
▼『その頬、熱線で焼かれ』の弘子さんのその後。どう生きていったのかと観劇。キツイ感じだった弘子さんが、治療し、帰国しても残るケロイドに苦労はしても結婚・出産・子育てと経験し、幸せを感じることが出来たことはうれしく感じた。一人だけど、相手もきちんと感じられます。演出・制作側の意向なのでしょうか…。台本を文字で読んだ時のほうが面白かったと感じてしましました。(女性)

【40代】
▼前作では見られなかつた素の弘子がそこにいた。普通の、どこにでもいそうな明るい女性だった。原爆の影響、差別について、考え続けなければならない。(男性)

ることが出来ました。自分の中で大切にした言葉も気持ちも多くありました。弘子ではなく、渋谷はるかという役者の魅力を伝えたかったのですね。もちろんそれが悪いわけではありませんが、今回はそれもハマつていらない印象を受けました。しかし、一人芝居を作ろうという劇団・役者の熱量は尊敬しています。また次の芝居を楽しみにしています。(女性)

【60代】
▼「其の」とは何か。ひとりの中にあります。もう少しそれが悪いわけではありませんが、今はそれもハマついていない印象を受けました。しかし、母と息子の、狭く広い物語に集約。納得。(女性)

【70代】
▼熱演に圧倒された。理不尽で辛く哀しい、抗えない運命を思つた。幕切れの「おかえり、ヒロシ」の一言に救われた。(男性)

【80代】
▼被爆者というより一人の女の一生という普遍性を感じた。危惧した緩慢さもなく、一人芝居とは思えない見事な舞台だった。(男性)

【80代】
▼はじめて一人芝居を観た。たった1人で演じ切った「渋谷はるか」さんから、感激・感動・感得の3感をいただいた。名演技をありがとうございました。(男性)

【80代】
▼はじめて一人芝居を観た。たった1人で演じ切った「渋谷はるか」さんから、感激・感動・感得の3感をいただいた。名演技をありがとうございました。(女性)

【80代】
▼はじめて一人芝居を観た。たった1人で演じ切った「渋谷はるか」さんから、感激・感動・感得の3感をいただいた。名演技をありがとうございました。(女性)



【性別・年代未記入】

▼原爆乙女なんて誰がつけたかマスコミは残酷だ。肌に刻み込まれたケロイドを治す名目で米国につれていかれ、アメリカはその原爆の「その結果」が知りたかったのだろう。彼女達のその後は、ずっと大変だった。アメリカいいなりの日本は今も続いている。

▼一人芝居なのに、相手もいるように感じました。弘子さんの息子への気持ちに、ホロッとしたまつた。舞台装置もすばらしかったです。



事務局に届いた「はがき」より

▼芝居を觀づけるために一言申し上げたい。『其の女』の観劇の際の出来事。残念ですが、携帯電話の着信音2回、およびメール?音数回鳴つた。(すでに)存じと存じます)

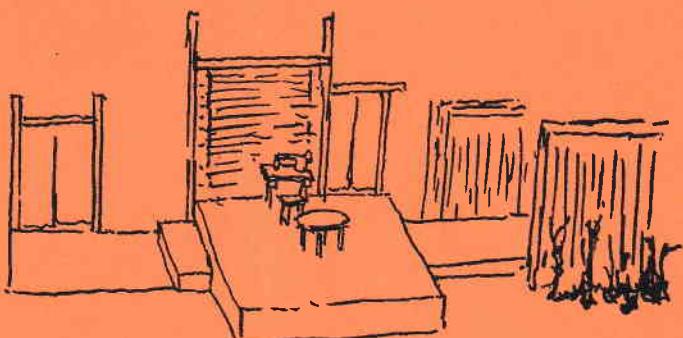
残念でならない。演者にとつては無類の衝撃を受けたことと思います。

演者は何もなかつたかの様に芝居をつづけていましたが、もう旭川に來たくない」と感じられたのではないのかと推察します。加えて、脛の部においても本格的な居眠り(イビキ)をされてた方がおられたと聞きました。周りで注意されても退去することなく、再びイビキ。

回りの観客は、その出来事で芝居に集中することが不可となり、一緒に芝居を作る市民劇場本来の姿勢がくずれる。少しずつ会員が増えている中で残念でなりません。結果として会員減(楽しくない)の要因にならなければよいかなど心配する会員でした。(乱文乱筆ですみません)

水道の会会員より

編集スタッフから



元ネタとなつた舞台『その頬、熱線に焼かれ』(1947)は旭川初の古川作・日澤演出であり、劇団の枠を超えた女優たちの独自企画でした。しかし被爆という題材の重さから、私にとつては少々辛い鑑賞時間をおこしたように思います。その後日談となる『其の女』。しかも一人芝居ということでもんな舞台になるかと覚悟して鑑賞しましたが、それは全くの杞憂に終わりました。原爆少女という特殊な境遇を鑑みずとも、普遍的な女性の物語になつており、最後まで飽きずに鑑賞することができました。のれんがひとりでに開いたら、卓袱台のコップの麦茶が少しずつ減つてゆくなりげない演出にも感心しました。劇団チョコレートケーキ、コンビの懐の深さをまたも感じさせてくれた10月例会。来年の8月例会『同盟通信』も益々楽しみです。